

---

領域名：精神保健看護

報告者：大川 嶺子

---

教育及び実践の課題

---

精神科病棟実習では、患者への対応で戸惑っている学生に対して、教員がその理由を問いかけ話し合う、対応モデルを示すなどして精神科看護実践を学んでもらっている。また、自己の対応傾向や対応上の課題を検討する「プロセスレコード」においても、臨床実習指導者から多くのコメントが得られ、学びを深めている。例えば、訴えの傾聴や説明・説得では対応できない妄想や幻聴による内服拒否の患者に対するタイミングを見計らったアプローチは、妄想・幻聴の生活への影響が一定ではないという知識と、説得ではなく日常生活場面を活用して関わるという技術の学びとなる。また、病棟での生活・活動で邪魔をせずに患者の傍らに居る、切迫感を与えずに患者の行動を待つなどの看護者の行為を体験することは、精神科看護者としてのありように関する学びとなっている。それらの学びは、精神科看護実践に必要な知識・技術と同時にそれを提供する精神科看護者としてのありようの複合的な学びとなっている。

---

活用した論文の概要

---

本文献は、「分離・乖離」(disjuncture)の理論と「疑似日常生活活動」の概念を用いて、8週間の実習で学生が精神科患者との関わりから学ぶパターンを抽出し、「学習過程のウィンドミルモデル」として提唱している。

このモデルでは、学生が患者と共に体験する「擬似的日常生活活動」(病棟での生活再構築の活動)で、それまでに体験したことのない「ルーチンではない状況」(disjuncture)が起こると、そこにはいつも学びのチャンスがあるとし、その状況を、①学生と教員に意識されない disjuncture、②学生に意識されない(教員は意識している) disjuncture、③学生に意識された disjuncture、④学生と教員に意識された disjuncture の4つに分類し、①は学生が実習に慣れ「ルーチンでない状況」が起こりにくくなった実習期間末期に起こるとしている。学生は、それらの状況からプロとしての精神科看護者のありようと看護実践に必要な知識と技術を習得しているため、どのような学びがあったかを教員と学生が相互に確認することが重要であるとして、その方法をいくつか提案している。

---

教育及び実践への活用

---

本学の精神科看護実習は2週間であるので、①学生と教員に意識されない disjuncture はほとんど起こらず、毎日「ルーチンでない状況」が起こっている事になる。③学生に意識された disjuncture、④学生と教員に意識された disjuncture に関しては、学びの確認が行われて来た。また、②学生に意識されない disjuncture に関しては、疑問を投げかける、場面からの印象を伝えるなどして新しい学びにつなげてきたが、振り返ってみると、限られた時間の中では③④を優先する傾向が強く、昨年度は「学習過程のウィンドミルモデル」の活用が進まなかった。今後は、本論文が提案しているように、実習前の学生にこのモデルを説明して学生自身が、学びの状況と自身の disjuncture を意識できる様にして、本モデルを活用して行きたいと考える。

---

参考文献

---

Linda Kragelund. (2001). Student nurses' learning processes in interaction with psychiatric patients: a qualitative investigation, *Nursing Education in Practice* 11, 260-267.

---

